

# 中国の経済学者 馬寅初

## (マー・インチュ 1882-1982) について

福 光 寛

### 目 次

0. はじめに
  1. 出生から留学・帰国まで 1882-1915
  2. 北京大学教員時代 1916-1927
  3. 抗日の闘士への変身 1927-1940
  4. 共産党への傾斜と戦後の復権 1940-1954
  5. 人口問題の提起と毛沢東による称賛 1954-1957
  6. 学問的良心のため負け戦(いくさ)に挑む 1958-1960
  7. 退職後の生活と名誉回復 1960-1982
- 参考文献

### 0. はじめに

馬寅初(マー・インチュ 1882-1982)は、中国の経済学者として、日本でもっとも有名かもしれない。人口論の大家で、人口増加を懸念する論稿を発表して、毛沢東と対立したが、文化大革命後、名誉回復が行われた。……しかし有名だとはいえ、多くの日本の経済学者の馬寅初に関する知識と認識は、この程度ではないだろうか。

馬寅初は、中国の人口の増加を懸念する論稿を発表して、確かに毛沢東と対立。北京大學校長の職を追われるが、文化大革命後、名誉回復が行われた。ところで近年、中国での一人っ子政策の見直しが日本に伝えられているが、一人

っ子政策で取られた、やや強引な進め方、たとえば人工流産と彼は無関係であると説明すると、驚く人がいるかもしれない。馬寅初を一人っ子政策や人工流産の提唱者と思込んでいる人も多いのではないか。小稿は、末尾に掲げた文献をもとに、彼が実際に主張したこととその起伏に富んだ人生を紹介するものである。

## 1. 出生から留学・帰国まで 1882-1915

馬寅初（マー・インチュ）1882年6月24日生れ。名元善，字寅初であるから、親が付けた名は元善（ユアンシヤン）であり，寅初（インチュ）は通称である。浙江省紹興府嵊州縣（チャオシンフ シェンチョウシエン）の人。実家は紹興酒の醸造業を営み裕福であった。

馬寅初は7歳のとき、まず近くの私塾で学んだが、『論語』『中庸』を読んで覚えるという伝統的教育を忌み嫌った。そこで父親馬慶常（マー・チンチャン 1851-1909）は、学識に優れた俞桂軒（シュー・クイシュアン）という人が隣村で弟子を取って教えていることを知り、寅初を入門させた。この俞桂軒のもとで寅初は、『大学』『中庸』『論語』『孟子』等国学の基礎を学び、書道、歴史故事を学んだ。歴史故事のなかで、明代の政治家、于謙（ユー・チェン 1398-1457）の清廉で献身的な生き方は深く記憶に残り、于謙が詠んだ「石灰吟」という詩を、彼は座右銘、人生の原則（准则）とした（馬（2006）3-4による。「石灰吟」はつぎのような意味の漢詩である。厳しい状況においても平然として、自身は粉骨碎身を惜みせず、ただ清白であったと記憶されたい）。

父の慶常には5人の息子がいたものの、長子は海外におり寅初以外は体がよくなかったので、寅初に仕事を継がせようとした。故郷を出て学びたいと考えていた寅初は、慶常に叩かれても、学ぶに行くと言い張った。慶常は、寅初に英語を学ばせれば海外との取引に役立つという計算もあって、友人で、上海で紡績工場を営む張縫声（チャン・フォンシェン）に頼んで上海で学ばせることにした。こうして寅初は教会学校の中西書院に1898年入学した。この学校の特色は英語教育にあり、午前中はすべて英語の授業だった。1842年の南京条約のあと、上海は通商の港として開放され、居住する英国人も多く、上海人は英語に触れる機会があった。寅初は初めて英語に触れたため、英語の習得には人一倍努力した。すでに寅初の実家が経済困難にあり十分な仕送りがなかった

ため、明かりを儉約した薄暗い部屋で、黙読、暗唱、その日の復習、翌日の質問の推敲をした。上海での勉学のあと、1904年に優秀な成績で天津の北洋大学に入学した（馬（2006）5-10 なお中西書院卒業年、北洋大学入学年、米国への留学年など、履歴に関する基本の年号が資料間で混乱している。なお全集第15巻には年譜378-401がある）。

北洋大学は、1895年に天津北洋西学堂として設立され、1896年に北洋大学堂と改称された。大学と名付けられた最初で唯一の国立教育機関であり、天津大学の前身である。彼は工業こそ国を救うという信念のもと、最難関の鉱冶（鉱冶）専攻に進学した（馬（2006）11-12；北洋大学は1903年に法律、土木工程、採鉱冶金の3科編成をとった：天津大学HPの校史沿革を参照）。

1907年秋に、寅初はとくに成績優秀であることから、北洋政府により公費留学の機会を得た。米国のエール大学に派遣された寅初は、経済学という学問の内容の豊富さに魅せられ、専攻の変更を決意した（鄧（2006）11-12；回顧して自分は体が弱かったので道具をもって山の上で測量するなどの鉱山学にはとても耐えられなかったとしている。全集15巻26-27）。専攻の変更は、留学期間が長くなることを意味していた。1900年に張桂君（チャン・グイチュン）と結婚していた寅初には4歳になる娘があり、妻はさらに腹に子を宿していた。両親は老いて家業は傾いていた（父慶常はその後1909年に亡くなった）。様々な躊躇があったが、彼は専攻を変更、エール大学で経済学士号取得後、さらにコロンビア大学大学院で修士号博士号取得を目指す困難な道を選んだ（馬（2006）13-14）。

この留学は、とくにコロンビアに移ってからは苦学だった。公費支給が手当てされていたのはエール大学での学費まで。コロンビアに移るにあたり馬寅初は再度支給を申請し、経費の支弁を担当した天津税関もまたできる限り支弁すると答えたが、実際には支出は遅れがちで、留学経験者でもある天津税関の責任者が離任したあとはその支出さえ途絶えた。寅初は、休日はアルバイトをして、時には建築現場や港湾で肉体労働もして勉学を続けた。苦学の末、1911年にPublic Revenue in Chinaで修士号を取得。1914年にThe Finances of the City of New Yorkで博士号を取得した。なおコロンビアにおける指導教授は、財政学や租税学の草分け的存在であるEdwin R. A. Seligman (1861-1939)である（選集1-2；鄧（2006）4-17；馬（2006）15-17）。中国人でまた経済論文で博士号を取得した例として、馬寅初はかなり早い。

なお馬寅初が中国に帰ったのは1915年初めとされるので、彼は1907年秋から7年余り、海外（英語圏）に居たことになる。帰国した寅初は、北洋政府財政部に勤めた。そこで見たものは、底なしの軍費支出、上から下までの官僚の汚職、帝国主義国による税支配など、絶望せざるを得ない当時の中国の状況であった。「今後は官僚にならず、金儲けに走らず、全力で教育救国事業をする」。そうした心情に寅初が至るのはこうした官職での経験に加え、蔡元培（ツアイ・ユアンペイ 1868-1940）に出会い、官僚を辞めることを忠告され、北京大学に直接誘われたことが働いていると鄧は書いている。蔡元培は浙江省紹興府山陰縣の人。同じ浙江省人である（鄧(2006) 22-23）。

## 2. 北京大学教員時代 1916-1927

1916年に北京大学校長の任を受けた蔡元培は、思想的に保守であるか革新であるかを問わず有能な知識人を北京大学に招聘した。蔡元培が北京大学で行ったことはそれだけではない。1917年末には院長などを選出できる教授評議会制度を大学に持ち込んだ。さらに北京大学を官僚になるための、あるいは金儲けをするための階段とする悪い習慣（风气）を正すべく、1918年初めに進徳会を組織し、参加者には、官僚にはならず金儲けもせず社会の悪劣な習慣にも染まらないことを宣誓することを求め、北京大学を教育と学術研究の場所にしようと努力した。馬寅初もこの進徳会に参加した（鄧(2006) 23, 25）。

なお寅初は1900年に張桂君と結婚しているが、北京大学に赴任後の1917年に王仲貞（ワン・チョンチェン）とさらに結婚した。これは当時、多妻制が認められていたことによる。そして張桂君との間に1男3女（うち長子は夭折）。王仲貞との間には2男2女をもうけた。そして99歳余りの長命で亡くなった。寅初が人口抑制の提案をしたのは70歳を過ぎてからのことだが、こうした私生活は、人口抑制の提案者にそぐわないと批判されることがある。また、彼の健康維持法も関心と呼んできたが、いずれの点もここでは以上の言及にとどめる。

北京大学で馬寅初は1918年3月には法学院経済系主任、1919年4月には第一任教務長に就任して、蔡元培を補佐した。1919年5月4日、五四運動が勃発すると、寅初はほかの進歩的教授とともに、デモに参加して逮捕された学生の釈放を北洋軍閥政府に求めた。その後、蔡元培が学生の釈放を求めたことに

絡んで辞任を表明すると、寅初はほかの教授とともに、教育部に出向き、もし蔡元培先生が辞職するなら、北京大の全教員も退職すると善処を請願した（鄧 (2006) 26-27；馬 (2006) 35。このとき蔡元培は大学の思想的自由を主張して学生の逮捕に反対し、北京のほかの大学の校長も一致して蔡元培を支持して北洋政府に抵抗した）。

馬寅初は1920年に入ると北京大学教務長の職を辞し、その後、休暇を取り、上海に向かった。上海では上海東南大学校長の郭乘文（グオ・チェンウェン 1880-1969）を訪ねて、同大学の商学院（1921年上海商科大学として独立 中国で最古の商科大学で今日の上海財経大学）増設について協力した。翌1921年初には浙江興業銀行顧問、さらに1922年には中国銀行顧問にも就任している（鄧 (2006) 31-45, 325-326；馬 (2006) 21）。寅初が持ち帰った経済知識が、中国社会で切実に求められていたことが伺える。

馬寅初は、1921年12月に北京大学で北京大学経済学会を組織し会長となった（全集1巻301-302）。この学会活動により、北京のほかの大学との交流も深まり、1924年に中国経済学社に加わった。経済学社は中国最初の大学の枠を超えた経済学会とみることができ、寅初の活動基盤の一つになる（鈴木 (1986) 447；鄧 (2006) 46-47, 325-326）。四川大学の孫大権によれば、1923年11月に清華大学の劉大鈞（リウ・ダーチュン 1891-1962 米ミシガン大学に留学 統計学の調査・普及に貢献）、陳長衡（チェン・チャンヘン 1888-1987 米ハーバード大学に留学）、陳達（チェン・ダー 1892-1975 1923年に米コロンビア大学で「中国移民の移動状況」で博士号取得）など12人の経済学者が、同社を設立した。寅初は翌1924年に加わった。劉大鈞が社長に、寅初は副社長に就任した（孫 (2006) 13）。

中国経済学社の発起メンバーは、清華大学の米国留学組が中心である。このメンバーに人口問題を研究する人がいたことが、注目される。発起メンバーの陳長衡は『中国人口論』と題した小冊子を1918年に刊行している。その内容は、人口論の学説や議論をハーバード大学の蔵書により明らかにするものとなっている。また経済学社が設立された1924年に、孫文は『三民主義』を著して、当時流行の人口抑制の議論は1) 人口減少で苦しんでいる国があることを知らない、2) 人口が増えなければ増える国によって征服されるまでだ、として明確に人口抑制論に反対し、4億の人口がありながら中国人が、民族主義の欠如のゆえに「散沙（バラバラの砂）」にとどまっていると批判した（なお陳

長衡は孫文の問題提起に答えた『三民主義と人口政策』（商務印書館：未見）を1930年に刊行した。また陳達は包括的な大著『人口問題』を1934年に刊行した。私は膨大な欧米文献の引用から、陳長衡や陳達の著述は、欧米の人口学の到達水準を中国に伝えるものだったと判断している。これらの文献から判断されるのは、人口について当時すでに様々な議論が積み重ねられていたことであって、あとで議論する馬寅初の人口論に、こうした先行業績への言及や評価がないことは、寅初を評価するうえで残念に思える点である。

馬の北京大学時代は1927年に終わりを迎える。1927年3月24日、南京に国民革命軍が入城したとき、暴徒が外国人や領事館に乱暴を働き、外国人に多数の死者、婦女子の凌辱などの被害がでた。いわゆる南京事件である。翌25日に今度は英米の軍艦が南京市内を砲撃、上陸して居留民を保護した。事件の背後にソ連の陰謀が指摘されるなか、北京を支配していた張作霖（チャン・ツオリン 1888-1927）は4月6日、列強の同意のもと、ソ連大使館および周辺を捜索を行い、多数の文書を押収、また北京大学教授李大釗（リー・ダーチャオ 1888-1927）を含む80人近くを拘束した。4月10日ソ連政府は大使を召還し、中国との国交を断絶。他方で中国南部を抑えていた蒋介石（チアン・チエスー 1887-1975）は、4月12日上海で同様に列強の支持を背景に、いわゆる上海クーデター（四一二事件あるいは四一二反革命政変）を起こして共産党勢力の排除に乗り出した。他方、張作霖は4月28日に李大釗を含む19人に対し裁判を行い「外国に通じた」という理由で死刑を宣告し即日執行した。北京大学に対しては解散を指示した。解散を指示された北京大学はほかの8つの北京の大学と合同して「京師大学校」設立に向かう。この混乱のなかで馬寅初は、1927年5月、北京大学を辞している（鄧(2006) 47, 326）。

### 3. 抗日の闘士への変身 1927-1940

北京大学を辞した馬寅初は、蔡元培に従って浙江省政府に入り、再び官僚になった。浙江省政府に入ったのは、もちろん浙江省が彼の故郷だということもある。蔡元培は南京の国民政府に身を投じて（投奔）杭州に至り、浙江臨時政治会議委員兼代理主席に任ぜられた。そこで蔡元培は北京大学の同僚であった、馬寅初、蔣夢麟（チアン・メンリン）ほかを浙江省政府に招聘した。寅初は麻薬禁止（禁煙）委員会委員となりアヘン取締や税制改革などを担当した。しか

しかつての北洋政府財政部勤務のときと同様に、官僚となった寅初が経験したのは挫折であった。たとえばアヘンの取締は一省だけで強化しても、意味がなかった。税制は間接税のみでまだ所得税が導入されておらず、貧乏人に課税していた（選集7；鄧（2006）48-53，326）。

1928年、馬寅初は国民政府立法院立法委員となった。さらに立法院経済委員会委員長と財政委員会委員長にも選出された。これらと並行して、1929年以降、南京の国立中央大学、国立金陵大学など多数の学校で教授職を兼任した。また連続して大著を公刊した（鄧（2006）326-327）。馬寅初は南京政府から最高経済顧問として遇されたともいえるが（選集3-4）、彼は政権にすり寄った言動をする人間ではなかった。

中国経済学社については、1927年に南京国民政府が成立後、主要メンバーが南下して南京政府に入ったことで、1927年から理事部が北京から上海に移された。またこの1927年の年会で寅初が社長に選任された。学社は、その事業に貢献するものも会員になれると1930年に会員資格を緩めた。結果として、これらの会員からの寄付に加え、浙江省政府や南京市による支援もあり、経済学社は北京時代に比べ財政的に豊かな組織に変貌した。1934年にその社員数は600人。うち200人が学者で、のこり400人には南京政府の高級官員、経済界の首脳が顔を並べ、社会的影響力も増した。その事業内容は、会員著述の叢書としての出版、雑誌「経済学季刊」の刊行、劉大鈞が主管する中国経済統計研究所の運営などであった（孫大権（2006）14-15）。

この1920年代後半以降1940年代までの中国における経済学の状況について、林・胡（2001）は、出版では依然として日本語からの翻訳が多いが、ヨーロッパの原書からの中国語訳も増え、また翻訳でない中国で書かれた文献が翻訳物を数量で圧倒するように変化した。また大学では欧米帰りの経済学者が次第に教壇を支配するようになった。そして中国経済学社が創刊した「経済学季刊」は、当時全国の多数の経済学者の支持のもと、とくに経済理論の探求で大きな役割を果たした、などと指摘している（林・胡（2001）6-7）。

1931年九一八事変（張作霖が爆殺された満洲事変のこと 爆殺は関東軍による陰謀説が有力）勃発後、馬寅初は「長期抵抗の準備」と題した一文を1932年6月に発表して、蒋介石の不抵抗政策、安内攘外（アンネイランワイ）（蔣中正つまり蒋介石が、九一八事変前の7月23日に示した方針で、国家の統一をまず行ったあと、国家主権を犯す外国を排斥するとした）政策を批判した。

表 米国留学組とその著作活動 (1930-1949)

氏名	学位取得年と取得学位	主たる著作と刊行年
馬寅初	1914年コロンビア大学博士	中国経済改造 1935；中国之新金融政策 1937；経済学概論 1943；通貨新論 1944
劉大鈞	1915年ミシガン大学学士	我国幣制問題 1934；中国之工業化与中国工業建設 1938
楊蔭溥	1923年ノースウェスタン大修士	中国金融研究 1936
陳達	1923年コロンビア大学博士	人口問題 1934
潘序倫	1924年コロンビア大学博士	会計学 1935
金国宝	1924年コロンビア大学修士	統計学大綱 1935
董時進	1925年コーネル大学博士	農業経済学 1933
何廉	1926年エール大学博士	財政学 1935（李銳との共著）；中国農村之経済建設 1936；中国工業化程度及其影響 1938（方显廷との共著）
方显廷	1928年エール大学博士	中国工業化程度及其影響 1938（何廉との共著）；中国之工業化与鄉村工業 1938
吳景超	1928年シカゴ大学博士	中国経済建設之路 1934
巫宝三	1938年ハーバード大学修士及博士	中国国民所得 1947
張培剛	1945年ハーバード大学博士	農業与工業化 1949

注) 林・胡 (2001) 6-9 を基礎に維基や百度で補って作成。なお馬寅初、劉大鈞、何廉、方显廷を四大経済学家と呼ぶことがある。同前9参照。

さらに1934年11月には、物価の大混乱と金融政策の不当について、寅初は孔祥熙（コン・シアンシー 1880-1967 米国に留学し、オーバリン大学を卒業、エール大学で鉱山学で1907年に修士号取得）財政部長を激しく非難する論説を発表している（鄧 (2006) 69-70：全集5巻425-427，全集7巻258-267）。馬寅初は、抗日戦争の前、戦時財政を賄う方法として物価騰貴をもたらした階級闘争を激化させる通貨増発に反対し、所得税の導入を提案している（鈴木 (1986) 448：選集7；なお北京政府では1914年に個人所得税が導入されているが、南京国民政府で個人所得税が整備されるのは1936年である。所得税制度の変遷については何家偉 (2008) が詳しい）。その後、1937年7月の盧溝橋事件を経て抗日戦争が始まる。そして重慶が国民政府の仮首都（陪都）になる。

なお1938年初には、経済学社の主要メンバーも重慶に移動し、経済学社も活動を重慶に移した。1938年12月重慶で行われた経済学社の年会では、法幣（1935年11月に発行が開始された不換紙幣）の価値維持について議論が交わされ、馬寅初が国難に際し財を成す人達を政府が懲らしめることを求めたこと



も事実だが、法幣価値の維持では馬寅初と孔祥熙の意見は一致しており、孔祥熙が法幣価値の維持の決意を述べると拍手が長く続いた（銀行週報 22 卷 29 期 1938 年 12 月 13 日国内要覧 4；「法幣法価打破之危険」全集第 11 卷 82-88；鈴木（1986）454-455）。

この当時と推定されるが、蒋介石は寅初を直接呼び出し、特命全権大使として、米国に移り住むことを提案した。懐柔の意図を感じた寅初は、「米国と中国の経済状況は違い過ぎ、米国経済の考察は中国が当面する抗戦を指導するうえで役に立たない。国難にあたり戦乱を避けて祖国を離れることはできない。国家存亡のときに、男は逃げることはできない（国家興亡、匹夫有责）」と答えたとされ、つぎの一文を 1938 年に残した。「私は、1. 国難を前にして、米国に決して行かない。2. 国家と民族の利益のために、話をする自由を保つ必要がある。3. 投機売買はしない、1 両の金、1 ドルの金も買わない」（全集第 11 卷 99；馬（2006）71-72）。

共産党系の新聞『新華日報』が馬寅初に言及するのは 1939 年 2 月 20 日の 3 面で寅初の講演「法幣と抗戦」を紹介したのが最初であるので、やはりこの当時と推定されるのが、共産党系の人士との交流の開始である。寅初の一連の言論活動に共感した許添新（シュー・ディシン 1906-1988 重慶で『新華日報』を編集）が寅初宅を訪問。その後、寅初は、周恩来（チョウ・エンライ 1898-1976 南方局書記として重慶で中共中央を代表 統一戦線工作を指導）とも意見交換をするようになったとされている（新華日報索引；鄧（2006）67-69，328；馬（2006）73-74）。

1939 年から 1940 年にかけて物価が急騰し、政府高官による不正蓄財が表面化するなかで、1940 年夏頃から、馬寅初が国民政府を激しく論難するようになるのは、事実である。しかし私自身、ひっかかったのは 1930 年代末の経済学社の年会で馬寅初が孔祥熙を面罵したとの記述がある（馬（2006）73-74；鄧（2006）67-69）が、こうした公開の席で相手を面罵したという証拠が当時の報道記事を検索しても出てこないことであった。この点を、四川大学の孫大権（2003）が解明した。それによると、1939 年年末の年会は行われず、1940 年春に重慶大学で行われたが、孔祥熙は出席しなかった。他方、1938 年 12 月の年会の時点では、法幣価値の維持派と引き下げ派で大論戦があり、孔祥熙と馬寅初は維持派として意見が一致していた。いずれにせよ 1939 年年会で馬寅初が孔祥熙を面罵したという記述は、1) 1939 年年会が年末に開催されず 1940 年

春に延ばされ、2) 1940年春の年会に孔祥熙は出席していないので、根拠がない（孫大権(2003) 141-143；孫大権 (2006) 16)。つまり1939年末の経済学社の年会で馬寅初が孔祥熙を面罵したというお話しは創作の可能性が高い。

もちろん1940年夏になると、寅初が高官への厳しい論難を始めていることも事実である。1940年7月発表の論説は、高官の腐敗を批判して高官に対する〔臨時財産税〕徴収を提案している（全集第11巻176-184；選集5-6；鈴木(1986) 456-458；もともと内陸農村部で実行可能な税収をもたず、納税を沿海都市に頼っていた南京国民政府は、日本軍の侵攻により経済的に遅れた西南地区に退却したことで税収が激減した。他方で、戦端の拡大で軍事費は急増、インフレも進行し、政府債務は急増した。そうした状況で寅初の主張に、どのような実行可能性があったのか。私自身は疑問を感じる。参照 賀水金(2009) 189-228, esp. 194-202)。

同じ1940年7月、重慶の陸軍大学講堂に招かれた馬寅初は、100人余りの高級将校に対して、戦時経済学の講演を行った。まず中華民族存亡の危機にあたり、心を一つにして抗日するべきで、カネがあるものはカネを、力があるものは力を出すべきだと訴えた（“全国上下应该同心同拔，一致抗日。有钱的出钱，有力的出力”）。そのうえで当面の財政が通貨膨張で賄われていることは一部のものが投機で儲けることにつながっているとして、通貨膨張を抑えて戦時利得税をかけることを主張。カネを出さず国難に際しカネ儲けをしていると、宋子文と孔祥熙を名指しで批判した。この講演の内容は蒋介石に伝わり、蒋介石を怒らせた。その後、蒋介石は、重慶大学校長の叶元龙（イエ・ユアンロン 1897-1967 寅初とほぼ同時期に米ウイスクンシン大学に留学、修士号を取得）を呼び出し、重慶大学に寅初を招いたことを非難したうえで、寅初を帯同して蒋介石のもとに来ることを命じるが、寅初はこれを拒否した（鄧(2006) 90-92；馬(2006) 80-83)。

宋子文は、馬寅初が政府の注意を引くことで高い職位を求めているのではと疑い、孔祥熙も財政部長とか中央銀行総裁のように高い地位の職なら受けるのではないかと考え、中央銀行総裁のポストを実際に打診した。これに対して馬寅初は、官僚にならない、金儲けをしないというのは、米国から帰国したときからの考えであり、北京大学でも進徳会に参加して、遵守してきたとし、さらに唐の詩人岑参（ツェン・ツアン 715-770）の《送張子尉南海》という五言律詩（この詩の大意は、友人の行き先には沢山の宝玉があるが、それにまどわ

されず清貧であると友人を励ますというもの）を引用して、自分はカネでは動かないと返答した（鄧 (2006) 94-96；馬 (2006) 78-79）。

馬寅初は1940年11月10日 重慶市内の劇場で行われた中華職業教育社（代表 黄炎培ホアン・エンペイ 1878-1965 黄炎培は周恩来と交友関係があり、1941年に中国民主同盟を設立。大戦後は内戦に反対する立場を取った）主催の公開講演会で、蒋介石との対立をさらに深めた。寅初は「蒋介石は民族英雄ではなく家族英雄にすぎない」と名指しで批判。宋子文と孔祥熙を除かなければ国家の正常な経済秩序は回復しがたい、と断言した。会場には憲兵もおり、蒋介石との対立は決定的となった。そしておそらく蒋介石の直接の指示のもと、12月6日早朝、憲兵が重慶大学に乗り込み、寅初を拘引し連れ去った（馬 (2006) 87-93）。

#### 4. 共産党への傾斜と戦後の復権 1940-1954

馬寅初は、1940年12月6日早朝 重慶大学の宿舎から憲兵により連れ出されたが、2日後の8日午前 事務手続きのため寅初は憲兵とともに大学に戻ってきた。この間に最後の懐柔があった。憲兵はもし財産税の話をこれ以上しないと文書で約束するなら、自宅に送り返すといったが、寅初はこれをきっぱり断った（鄧 (2006) 112-113）。この彼の態度は、のちに人口問題をめぐる論戦で、改悛の意志を示せば処分を免れるとの忠告を断固受け入れなかった頑固さとよく似ている。

12月8日、馬寅初は、集まった重慶大の学生に対して講話を行ったが、蒋介石の名誉は多くの人の犠牲の上に築かれたものだと述べたところで制止された。そのあと、重慶大学の多くの学生と撮った集合写真が残っている。そして実際は寅初を集中営とよばれる牢に放り込んだのだが、12月13日、戦争地区の経済状況視察に派遣したという「嘘」が発表された。しかし逮捕拘禁は明らかだった。その後、学生たちは、大学当局や教育部の制止を振り切って、1941年3月30日、寅初の生誕60年を祝う会を重慶大学大講堂で盛大に催した。実際の誕生日は6月24日だが、早期釈放を願って会は早めに設定された。また重慶大学の学生たちの手で「寅初亭」と名付けられた庵が建築された（鄧 (2006) 118-132；馬 (2006) 99-108）。いずれも寅初が学生に慕われていたことを示す挿話である。

当局は1940年12月8日に馬寅初を逮捕したあと、まず貴州息峰集中営に、そして1941年8月からは江西上饶集中営に拘禁した。貴州息峰集中営は、政治的重罪犯を閉じ込めていたところで、当時は張学良、楊虎城などが幽閉されていた。ここでの寅初は外部との接触はできなかったが、散歩するなどの一定の自由があった。しかし1941年8月からの江西上饶集中営は、共産党の志士、愛国人士など数千人が拘留されていた場所で、寅初の扱いは周囲から隔絶した独房に拘禁という厳しいもので、もはや散歩の自由はなかった(馬(2006)106-108:なお馬寅初の逮捕と幽閉は方万里(1941)により、詳細が日本に伝えられている)。日本軍の侵攻のため江西集中営の福建移転(江西から長距離の移動になる)が決まった時、寅初は桂林に移された。その桂林も維持できなくなったときに重慶に移され、寅初釈放を求める声の高まりもあり、1942年8月下旬、当局は馬寅初を釈放した(鄧(2006)134;馬(2006)106-108)。

釈放後、馬寅初は当局の監視下に重慶の(重慶大学の宿舎を引き払った家族が移り住んでいた)歌樂山に軟禁された。しかし重慶大学にもどることはもちろん、公職につくことも禁止され、公開講演も禁止された。1945年に入っても、なお蒋介石=国民党による言論統制は続いた。そうした状況で、寅初の論稿「中国の工業化と民主とは不可分である」を、共産党系の新聞と雑誌が全文をそのまま掲載したことは、寅初と共産党の距離を縮めることになった(全集12巻255-275;鄧(2006)133-143;鈴木(1986)464;馬(2006)112-114。新華日報索引によると、この論稿(1945年2月8日2-3面)のあと、同紙面に寅初は活発に登場している)。

1946年7月、中華職業教育社の黄炎培の招きに応じて中華工商專科学学校の経済学教授に就任したが、これも政府の妨害によりなお大学で教えることができない状況の反映である。また国民党の弾圧は次第に暴力化した。1948年末、杭州に家族をかくまったうえで、寅初は共産党の庇護のもとに他の民主人士とともに華北解放区に向かった。上海からまず船で香港にでて、香港から再度船で北京に向かう行程で、北平(北京)に1949年3月18日に達した(諸(2012)7-11)。

国民党の敗北は次第に明らかであった。1949年1月31日に北平が平和裏に解放され、3月25日に、毛沢東、周恩来など中国共産党指導者が北平に入った。4月23日に南京が解放され、5月3日に浙江省杭州が解放された。杭州解放を知った馬寅初は家族の安全を確かめるため、帰郷を希望した。帰郷してま

もなく寅初は浙江大学校長に任命された（1949年8月）。就任挨拶で、国民党支配下の1947-48年、浙江大学校長の竺可楨（チュー・クーチェン 1890-1914）米イリノイ大学農学部を経てハーバード大学で博士号取得。気象学の大家）から直接、浙江大学で教えるように要請があったが、国民党政府の横やりで実現しなかった。その自分が浙江大学の校長になったと感慨深く語っている。1949年9月に中国人民政治協商会議第一次全体会議に出席。中国政府委員、政務院財政経済委員会副主任、華東軍政委員会副主席に任命された（鄧(2006) 226-236）。国民党政権下、とくに1940年逮捕後の苦境を考えると、浙江大学校長への任命、そして新中国の建国に立ち会う立場への昇格を、馬寅初は率直に喜んだに違いない。

財政経済委員会副主任という形で馬寅初は中央政府の行政に再び触れている（1949年10月）。このポストへの就任は周恩来の推薦があったとされる。この財政経済委員会が属する政務院の副総理は陳雲（チェン・ユン 1905-1995）であり、財政経済委員会主任は薄一波であった。財政経済委員会が当面したのは、戦後のインフレ収束問題であった（諸(2012) 6, 20, 33-34）。馬寅初はこの活動を通じて周恩来に加えて、陳雲の知己と信頼を得るようになった。

そして1951年5月、北京大学校長に任命された。北京大学校長という中国のアカデミズムの頂点のポストに馬寅初は就任した。北京大学は留学から帰って最初に就職した大学であり、意に反して辞した大学でもあり、嬉しかったはずだ。ただ気になることがある。就任時に建学（建校）方針を聞かれて、それは中央がきめることで、校長は任務をするだけだと返している点。そして、延安大学校長であった江隆基（チアン・ロンチー 1905-1966）チアンは北京大学に一度入学後 日本明治大学に留学。しかし抗日運動により退学。結局ベルリン大学に留学して卒業）が大学党書記の含みで副校長として翌1952年に赴任したとき、江が「あなたは私の先生ですから、あなたの指導のもとに私は補佐します」といったのに対して、「いや政治的なことについてはあなたが指導してください」と返している点（鄧(2006) 237-239；馬(2006) 167-168）。これらは政治に対する大学の自由を重視する人からすれば、物足りない言い方もしれない。同じ問題が1957年のものとされる発言にもある。そのとき大学内における党委員会の存在について、寅初は教育計画をたてるにあたって学生の思想や家庭を把握している党委員会は必要な存在だと指摘。党委員会を排除する議論を否定している（馬(2006) 168-169）。

なお江隆基は、1958年から蘭州大学校長となり文化大革命のときに批判闘争の対象となり殺害されるが、政治活動のため荒廃していた蘭州大学の研究教育の正常化=建て直しに貢献が大きかったとされる。北京大学でも馬寅初を補佐して、戦後の改革を主導した貢献は大きいと思われる。その考え方は穏当であり、たとえば陳迫達（チェン・パイダー 1904-1989 毛沢東の秘書として知られ文化大革命のあと、4人組みとともに逮捕拘留された）が北京大学を共産主義の学校にしようとしたことに抵抗したとされるほか、寅初の人口論への批判にも同調しなかった（維基の「江隆基」「蘭州大学」「陳迫達」、蘭州大学 HP などによる）。寅初は、江隆基を副校長に得たことで助けられたのではないか。

## 5. 人口問題の提起と毛沢東による称賛 1954-1957

1953年に中国で最初の人口調査が行われ、11月1日に結果が発表された。6月30日現在で6億190万人。自然増加率は1,000分の20。毎年1,200万から1,300万人の増加。馬寅初はこの1,000分の20という数字が低すぎると感じた。この疑問から出発して、馬寅初は人口問題の研究を始めた。1954年から1955年にかけては、浙江省で現地調査を行った（諸(2012) 70-72）。

もともと人口問題については中国共産党内でも、意見の対立があった。人口抑制（制限）について、一方でそれを支持する意見が出される一方、人口の多さは生産力の高さを示すのだから、人口抑制というのはマルサスの考え方だという、相反する議論が併存していた。

馬寅初は1954年9月全国人民代表大会常務委員にも選出されるが、その立場も利用して多くの現地調査を行い、増加率1,000分の20という数字が楽観的に過ぎ、2.2%前後に達しているとの結論に達した（この2%という数字は全国29の大都市と、選択された農村など3,018万人についての抽出調査の結果で、出生率3.7%と死亡率1.7%の差を取ったものだった）。つぎのような点を彼は指摘している。1) 解放前に比べ失業が改善され結婚するものが増えている、2) 産前産後の休暇制度が設けられ、衛生事業が進み乳児死亡率が減少する、3) 老人死亡率が減少しており、老人に対する政府の配慮が進む。4) 戦争が終わったことで国内秩序が落ち着き、国民の不慮の死が大きく減る、5) 社会制度の変化により、独身により一生を終える者が減る、6) 旧社会の思想の名残で、子供の多いことを幸せだと考えられている、7) 政府が多産家庭

に補助を与えている（『文献』1979年第2期36-37；諸（2012）76）。

これらの指摘は、人口増加率が、社会的環境、文化的価値観など、様々な要因の変化にも影響されて変わってゆくものであることを認めて、人口増加率の急激な上昇を懸念したものと見える。そして人口の抑制を進める必要がある、というのがこの懸念から出てくる問題であった。同じ懸念を表明した人はほかにもいた。邵力子（シャオ・リーツ 1882-1967 陳独秀とならび中国共産党の発起人の一人 1926年から国民党に移り解放後は全国人民代表常務委員。文化大革命で迫害を受けた）は、すでに1954年の人民代表大会で人口抑制の必要性を論じていた。1955年春に馬寅初は、この邵力子と衛生部長の李徳全を自宅に招いて懇談した。その結果、人口抑制について、劉少奇国家主席が支持を表明していることを確認し、この問題を進めるには、研究の継続、多くの宣伝、党の指導部と学者の支持が不可欠だと、結論付けた（諸（2012）77-79）。

この頃とされるが、馬寅初が書き上げた論文「人口の抑制と科学研究」を陳雲に送り意見を求め、また陳雲がこれを読んで答えている。陳雲は寅初の論文の視点に賛成であるとしたうえで、次のように注意した。「新しいものが現れるとみな阻止に出会うもの。誰もが受け入れられるよう十分な思想準備をする必要がある」と。さらに言葉を足して「機会があれば中央の指導者に対して、馬先生のため宣伝に努めますので、先生は先生で友人や諸先生によく話をし、彼らの意見をよく聞いて下さい」。これは極めて儀礼的な返事のようにも取れるが、寅初の答えがおもしろい。「陳副総理のお話しは納得できることが多い（踏实多了）」「むつかしいことに挑戦する（知難而進）というのが私の生涯の信念で、困難に出会って引きさがることはいけません。流れに沿ってただよい、身の安全を図る（随波逐流、明哲保身）というのは私の性格にあいません。」（馬（2006）179；諸（2012）79-80）

しかし1955年内に人口抑制を提案する好機は得られなかった。1955年7月、馬寅初は全国人代（全国人民代表者大会）第一期二次会議の浙江省グループ会議で計画生育実行の必要性を表明したが、賛成者が極めて少なかったので、時機ではないと考え、発言稿を自ら回収した。邵力子が寅初の発言を支援しようと避妊の常識の宣伝を強化する提案を行ったが、この提案も同様の運命をたどった（諸（2012）80-81；梁（2011）54-55）。

1956年6月に開催された人民代表大会第三次会議で馬寅初は視察報告とともに、人口抑制（控制人口）問題を再度提出し、具体的な提案も行った。彼は

一組の夫婦に二人の子供が良いとし、三人目からは徴税する。四人目にはさらに重く徴税する。つまり課税というマイナスの経済的誘因を与えて、生まれる子供を調節することを提案した。この提案は経済理論家の代表により実際的（切実）で実行可能（可行的）とされた（諸（2012）82-83）。興味深いのは、馬寅初の提案は、一人っ子政策ではなく、かつ、強制ではなく経済的動機付けで誘導しようとしたものだったこと、である（下線福光。以下同じ）。

馬寅初は指導部の姿勢が変わるまで待った。1956年9月周恩来が中国共産党第八次代表大会の報告において、第2次5ヶ年計画で人口抑制（节制生育）専門機関の設立を提議したとき遂に機会がきたと思われた。馬寅初は、党と国家が人口問題を重視していることに興奮した（馬（2006）181；諸（2012）83）。1957年2月27日の最高國務会議での講話で毛沢東は、人口抑制（节育）を良いことだと評価して、専門機関を設けて、方法を考え宣伝する必要があるとした（始末55）。そして1957年3月1日午後、毛沢東、劉少奇をはじめ党と国家の指導者が並ぶ最高國務会議で、馬寅初は、人口問題についての主張を述べ、次の言葉で発言を閉じた。「我々の社会主義経済は計画経済だが、もし人口を計画にいれられないのであれば……計画経済を成し遂げることはできない（那就成其为计划经济了）」。会場は熱烈な拍手（掌声）で包まれ、毛主席はすぐに同意を表明した。「人口は計画して生産できるものではないか、これは一種のアイデアだが、完全に研究し試験できる。馬寅初はこの点を極めて上手に説明した。私は彼と同志だ。」（馬（2006）183；諸（2012）84；梁（2011）55-56）。

この毛沢東との言葉のやりとりは極めて有名だが、毛沢東が称賛したのは人口を計画経済の枠に入れることで、人口の水準についての評価は含まれていないことに注意すべきだろう。

なお馬寅初全集に記録されている日付は1957年3月2日、その内容も人口問題での議論と研究の必要を主張した程度の穏当な中身。那就成其为计划经济了という激烈な言葉は見当たらず、毛沢東との対話も記録されていない（全集第14巻501-502）。

人口問題では人工流産による調整という荒っぽい方法が議論されることがあるが、馬寅初は、人工流産には反対であり、具体的な対策としては、一夫婦に二人の子供が良いとして奨励し、それを超えた子供をもつ夫婦に課税するという提案していた（諸（2012）84-85；当時こうした主張を熱心に行ったことは確認できる。寄稿掲載紙は以下のとおり。『文汇报』1957年4月27日；『北京日



報』1957年4月29日；『大公報』1957年5月9日）。

1957年6月8日に中共指導部は反右（右傾批判）に転じるが、その渦中に開かれた全国人代第一期四次会議で寅初は新人口論についての書面発言を行い、正式に計画生育を提案した。7月5日に人民日報に寅初が執筆した「新人口論」が発表された（なおこの日本語訳は1957年10月には日本国内で印刷配布されている）。この新人口論では、一夫婦に二人の子供が良いとして奨励し、それを超えた子供をもつ夫婦に課税するという経済的動機で誘導する提案が消えている。それが反右派闘争の開始と関係があるのかは不明である。

この新人口論における新たな提案3点を確認しておく。第一に、1958年からの5年間の間に改めて人口調査を行い、人口動態統計を整備することを求めている。第二に、子供が多いことを喜ぶ背景には伝統的な観念があるとして、人口抑制（節育）の重要性、そして晩婚の良さの宣伝を求めた。第三として避妊具（避妊）を広く宣伝することが重要としている。人工流産については胎児の生命権からみると殺人であり、母体にもよくないし、女子にだけ負担をかける、医者にも負担になる、などの点から避けることを求めている。つまり、新人口論における人口抑制にむけた具体的な政策提案は、人口調査実施提案を除くと、人口抑制の重要性、晩婚の良さ、避妊具、以上の3点の宣伝普及に過ぎない。一人っ子政策はないし、政策提言としては統計の整備、晩婚と避妊具の宣伝にとどまり、人工流産については、母体によくないとして避けることを求めている。これが、実際に馬寅初が述べたことである。

## 6. 学問的良心のため負け戦（いくさ）に挑む 1958-1960

馬寅初に対する評価が崩れるのは、1957年末から1958年にかけて、大躍進運動が発動されるプロセスにおいてである（福光 201-203）。何がいけなかったのか。人口問題で懸念を表明することは、人口の増加に対して生産の速度が追い付かないことを懸念するのと同じである。しかし毛沢東の考えでは、人が多いほど力は高まり（干劲大）、生産も高まるはず。だから人が多いことを恐れることはない（馬（2006）186-187）。この毛沢東の言い方は、人口の増加が、生産力にはすぐにつながらない子供たちの増加になることを無視している問題があることは確かだが、人口増加が、それを上回る生産力の上昇があれば吸収できることを指摘している点では正しい。となると問題は、当時進められてい

た生産増加方法の評価になる。結果としてではあるが、寅初の議論は、当時進められていた社会主義化では生産の伸びが十分でない、と主張していることになりかねない。社会主義化を加速しようとしていた人々にとって、寅初の考え方はまさに社会主義の優越性を否定するようには見えただけではないか（何/朱/廖（1960）59：なおこのお話とは違う文脈で、社会主義化に伴う商品のコストの上昇、品質低下、無駄の発生などの矛盾について寅初は別稿で詳述している。『北京大学学报』1957年第3期13-14、17-18）。

1958年5月9日の光明日報の記事で名指しの批判記事が登場してから2年間ほどで200を超える馬寅初批判の記事が書かれた（馬（2006）187）。その中で群を抜くのが、その光明日報の記事数27篇である。光明日報は第二次大戦後、中国民主同盟により創刊された新聞で知識人を対象にしていた。批判記事が始まる前の1957年11月11日、光明日報は、民主党派の人々と馬寅初ら無党派の人々とを招いて社務委員会を開き、章伯鈞（チャン・ポーチュン 1895-1969）社長、儲安平（チュー・アンピン 1909-1966?）編集担当副社長をそれぞれ解職し（この二人は文化大革命で家族を含め迫害された。儲安平は1966年に失踪したが殺されたと考えられている）、社長に楊明軒、副社長に陳此生を充てる人事を決定している。実は1957年5月下旬に至り、共産党の独裁を批判する議論が表面化する。その極点とされるのが、儲安平が、6月1日の統一戦線部の座談会で、非党員が党員の顔色を窺いながら自分の見解を述べるのは、国家に対して責任ある態度だろうか、と問いかけた発言である。国家を指導することと国家を所有することは違う、とも述べた。さらに毛主席、周総理に対して、民主党派との連合政府はどこに行ったのかと問いかけた。これらの発言が翌日の人民日報と光明日報に掲載された。この記事に衝撃を受けた毛沢東が、6月8日に反右派闘争開始を宣言したとされる。なお儲安平はその後、猛烈な批判を受け解職、7月15日には人民日報に「人民に投降する」と題した手記を寄せ全面降伏した（この儲安平の事件については傳奇人物網に詳しい匿名記事がある）。このようにして民主党派人士の自由な発言が封じられたそのタイミングで、新人口論は登場した。しかし、馬寅初批判が始まるのは、あくまで大躍進の号令が1957年の末にかけられてからである。批判が始まるまで、およそ半年間の時間差は注目される。馬寅初は、その間に引き下がることもできたがあえてそうしなかった。

馬寅初が1958年に受けた攻撃は新聞雑誌によるものだけではない。たとえ

ば壁新聞がある。またその内容は個人の人格を攻撃するものであった。有名なものに寅初宅を1957年に訪問して懇談した学生たちが1年後の1958年3月末に張り出した壁新聞がある。その内容は、馬先生は、北大主義、資本主義、個人主義を我々に教えたと批判したもの。学生たちは馬寅初の励ましの言葉を、個人の名誉を追及する北大主義、あるいは個人主義ととらえ、外国語を学んで海外の経済学を学ぶ必要を説いたことを、社会主義経済学の軽視、資本主義に走るもの、と批判した（梁（2011）59-61）。歓談の結果が攻撃に結び付いたことに馬寅初は心を痛めたに違いない。

1958年5月4日、北京大学建校60周年式典に現れた中央宣伝部副部長（紅旗の主編でもある）陳伯達は講話のなかで、北京大学の老教授の中には西欧の資産階級の没落時代の教育を受けたものがあると留学組への敵意をあらわにし、現在の学術界の任務は労働者・農民に学ぶことだとなげ、「馬老人の新人口論は検査されねばならない」と公の場で学生教員を煽った。7月1日、北京大学食堂で馬批判が行われた。会場に現れた、中央文教小組副組長の康生（カン・シェン 1898-1975）は、「新人口論の著者の姓は馬だと聞くがそれはマルクスのマなのか。…私の見るところではマルサスのマではないか」と痛罵した。出席していた馬寅初は、「わたしをマルサス主義者だという人がいるが、私にすれば彼らは教条主義者で反レーニン主義者だ」と切り返した。馬寅初は批判大会で一步も譲らず、「態度がよくない」「群衆に対立する」などとされ、以降の批判大会は寅初抜きに行われた。また学校内のあらゆるところ、最後には寅初の自宅にまで、寅初批判の壁新聞が張られ、寅初批判の突撃隊が多数組織されて、ドラを鳴らしスローガンを叫んで昼夜練り歩いた（馬（2006）186-187；鄧（2006）292-294；諸（2012）94）。

激しい個人攻撃にもかかわらず、馬寅初は1959年までどの職位も失うことなく、また各種の国事活動にも参加した。1959年3月12日、第二期全国人大代表に継続当選した。4月12日には第三期全国政協委員に当選した。4月27日には第二期全国人大常委会委員に当選した。5月2日には、中ソ友好協会副会長として中ソ友好協会第三次全国代表会議に参加、併せて新一期理事に当選した。5月3日、寅初は首都記念五四40周年記念活動に参加し、主催者（主席台）の前に着席した。9月15日に寅初は毛主席が招請した各民主党派団体代表者会議に参加した。9月28日、寅初は中華人民共和国建国年慶祝大会において、毛沢東、劉少奇ら党と国家の指導者とともに主催者側ひな壇に着席し

た（梁（2011）67）。

馬寅初に対する2回目の個人攻撃は1959年後半以降である。つまり攻撃は1958年に一度、それから間を開けて1959年後半以降。この2回目の攻撃は、寅初が反論を続けたことが誘発したように見える（梁（2011）68, 70）。1959年7月から8月16日まで行われた廬山会議のあと、再び反右派闘争が高まることを予想した周恩来は寅初と会ったときに、固執せず大局に従い自己批判（检讨）を書けばなおよい、とアドバイスした。陳雲は自ら誤りを認める（认错）ように勧めた。しかし二人からのアドバイスを寅初は婉曲にことわった（馬（2006）194；諸（2012）107-108）。ここで再び、引き下がることができたが寅初は戦うことを選んでいる。

『新建設』の1959年11月号と『北京大学学報』第5期は馬寅初が書いた「私の哲学思想と経済理論」を同時に発表した。『新建設』編集部は寅初から原稿を受け取ると、中央宣伝部に検閲（审阅）を願いでた。担当は康生であり、康生はこれを挑戦とみて応戦を宣言した。この原稿の最後の付帯声明に以下の有名なフレーズ単身匹馬があるが、負けると分かっている戦いに挑む悲壮な覚悟が伝わる。

「すでに齢80に近く、敵の数の多さも明らかだが、単身馬に乗って応戦し、戦死するまで戦うまでだ（我虽年近八十，明知寡不敌众，自当单身匹马，出来应战，直至战死为止）。」（『学報』93）「何人かの友人は退却を勧めた、さもないと私の政治地位に影響すると。…しかし私は退却できない。なぜならこれは政治問題ではなく純粋に学術問題であり、学術問題で…真理を堅持することは、個人的利益やときには命より大事だからだ。…私が自己批判（检讨）を拒むことを、軍隊で上官の命令を拒む行為と友人たちが同一視しないことを願うばかりだ。」（同前94）

このあと『新建設』は1959年12月号から批判記事の掲載を始めた。寅初は「重申我的請求」という文章を『新建設』に送り付けた（12月12日受け取り）。「重申」は先ほどの有名なフレーズを冒頭に再度掲げ、彼に対する批判は200あまりだが生産的でなく大同小異であること、百花斉放、百家争鳴がうたわれながら、実際には寅初に共感する人々は沈黙を強いられている（不敢签名）ので、自分は単身戦うと言わざるを得ないのだ（我只得唱“独脚战”）、と述べている（選集436-442）。『新建設』編集部は再び中央宣伝部に検閲（审阅）を願いで、12月15日に「重申」は康生のもとに届いた。康生はただちに北京大

学党委第一書記陸平を呼び出し、これは「學術に名を借りた右派の攻撃（进攻）だ」として、「馬寅初にこれ以上校長をさせることはできない。……徹底的に批判して北京大学から去らせるように！」指示した（諸（2012）110-111）。

日本では1959年に小竹文夫氏（1900-1962）が「中共における第一次五カ年計画批判」という論文を書かれて、そのなかで馬寅初『我的經濟理論哲学思想和政治立場』（1958）を取り上げ、これが、中国人による第一次五カ年計画批判と考えてよいものだと指摘している（小竹（1959）24）。小竹氏によると、計画経済では価格が公定であるため、不均衡を調整する方法がない。馬寅初は、第一次五カ年計画の結果として、極めて多くのまた複雑な不均衡がもたらされたことを指摘しているが、小竹氏はこうした指摘そのものが計画経済への批判にほかならないとまとめている（小竹（1959）32ほか）。これはなかなかの慧眼ではないか。

他方で寺崎祐義氏は中国で出た馬寅初批判の文献に沿って、馬寅初批判をまとめた（寺崎（1962））。その文献リストをみると、1950年代から1960年代にかけて日中国交回復がまだ実現しないなかで、中国の文献が大きな時差なく日本の大学で入手できていたことがわかる。寺崎の議論が中国の主流派に迎合しているのは残念だが、批判するのが政府側で批判側の文献量も多かったために、寅初批判が正しいように見えたことも推測できる。

若林敬子氏は馬がなぜ批判されたかを以下のようにまとめているが、私の見方はこの若林に近い。「馬は社会主義建設の段階にある現実から出発して、諸般の経済建設を進めるべきであるというのに対して、批判者はまず」「社会主義制度の優越性、党の指導と解放された人民の革命的積極性を明らかにしてかからねばならないというのである。」国民経済の欠陥について多くの例証を挙げ「その調整の措置を講じなければならない」という論法は、大躍進の途を一路邁進しようという「時期には不適當であり、かつ有害だとされたのであろう」（若林（1989）38）。

1959年12月19日、『新建設』雑誌は中共北京大学党委に書簡を送り審査（审看）を求めた。中には馬寅初が『新建設』1960年1月号上に発表を求めた「重申我的請求」があった。12月後半に入ると学内でさまざま批判集会が開かれ1月6日には、北京大学毛沢東経済思想学習研究会、北京大学毛沢東哲学思想学習会、北京大学人口問題研究会が連合して、全校の学生教師に参加を求めて馬寅初批判報告会を開いた。これに対し馬寅初は出席の機会を求めた。そし

て1月11日午後に寅初も出席する討論会を開くことでこれらの代表者と寅初は合意した。1960年1月11日、この3つの学習会は連合して「馬寅初の経済理論哲学思想と政治立場討論会」を開いた。会議の焦点は、大学秘書である韩萃卿（ハン・ピンチン）による暴露であった。韩は、寅初が商務印書館の株を68,000元、上海闸北火力発電与自来水会社の株を20,000余元保有し、家賃収入が160余元あったことなど個人の財産情報を暴露。また馬家の土地は買ったものなのになぜ補償されないのかと土地改革に不満を表明したこと、さらに1957年の反右派闘争で失脚した、罗隆基（ルオ・ロンチー 1896-1965）や章伯钧（チャン・ポーチュン 1895-1969）を優秀な人材として擁護、章乃器（チャン・ナイチー 1897-1977）についても高名な経済学者だと述べ、定息（商工業者の資産に固定利率を支払う政策）を止めることに反対した章乃器の主張を正しいとしていたことなど、日頃の発言を暴露した。韩の暴露は参加者を刺激し、寅初は集団攻撃（围攻）を受けた。1月12日寅初の血圧は190に上昇し、入院治療となった。その後3月28日国務院は寅初の北京大学校長職を免じた（梁（2011）71-74）。

なお1960年1月3日に馬寅初は教育部部長に会って北京大学辞去を申し出、1月4日に書面で辞職報告をしたとの指摘がある（諸（2012）118）。これが正しいとすると、韩萃卿による愚かな裏切りが実行されるより前に辞職を決意していたことになる。

## 7. 退職後の生活と名誉回復 1960-1982

このあと馬寅初は全国人大常務委員などの職位は維持した（選集15は職を離れたとしている）。しかし1962年1月、浙江嵊县視察を行ったときに肺炎を患い、健康を損ねた。また1965年片足（一筋の腿）が麻痺（瘫痪タンホアン）した。1965年の末に83歳の高齢を理由に、常務委員の職務から離れたが、同等クラスの処遇を受け続けた（梁（2011）75；諸（2012）123）。なお文革の間、被害を受けた文化人と違って、寅初は家から連れ出されて乱暴されるとか、自宅を襲われ家財を壊されるなどの攻撃（冲击 チョンチー）は受けることはなかった。

その文革中の馬寅初の悲劇と知られるのは、彼が、1960年以降、数年かけて書き上げたと言われる大著『農書』の原稿が家人の判断により焼却されたこと

だ（鄧 (2006) 304）。……文化大革命が始まった時、原稿の紙巻は大きな引出：櫃一杯になり、百万字以上となっていた。家人には寅初を守る目的もあり、責任を追及される恐怖もあって、四旧（スーチュウ）とみなされるものを焼き払ったと考えられる。当時こうした行為はそれを行う本人にとっては「破四旧」（古い思想、文化、風俗、習慣を破壊する）という「革命」行為だった（全国各地で、古き時代の象徴である建築物や仏像などが破壊され、芸術的価値の高い書画が燃やされた。王曙光 (2006) 183）。

馬寅初は1972年90歳のときに直腸癌のため、周恩来首相の直接の配慮により天津市人民医院院長で癌研究の権威である金显宅（チン・シエンチャイ 1904-1990）が率いる医療小組により直腸癌の切除手術を受けた。手術後、寅初の下半身は麻痺した。1976年1月周恩来がこの世を去ると、寅初は北京医院を訪問し遺体に告別した（鄧 (2006) 307-309；諸 (2012) 153-156）。

1977年5月1日、馬寅初は中共中央主席、国務院総理、中央軍事委員会主席の華国鋒（ホア・グオフェン 1921-2008）が出席した園遊会（游园活動）に参加した。これは1976年10月6日四人組が逮捕されたあと、各界の人を集めた初めての催しだった。1978年初め、鄧小平（ドン・シアオピン 1904-1997）が政権に復帰し第五期全国政治協商会議主席になると、馬寅初は全国政治協商会議常任委員となり、同大会の執行主席の一人となった（梁 (2011) 75）。

1979年2月4日、上海冶金研究所の相徳欽（シアン・ドーチン）が中央に対し、馬寅初が最も早く人口の抑制を主張した貢献を指摘し、馬寅初の名誉回復（平反）を手紙で訴えた。まもなく、この手紙が一人の中央指導者により宋任穷（ソン・レンチオン）に回す指示がつけられた。宋任穷は当時、組織部長で幹部の名誉回復：平反の責任者。6月21日に陳雲と胡耀邦（フー・ヤンバン 1915-1989）が馬寅初の平反を指示した（鄧 (2006) pp. 314-315；諸 (2012) 160-166）

1979年7月16日、中共中央統戦部副部長の李貴（リー・クイ）は北京市東総布胡同32号の馬寅初家を訪れ、つぎのように述べた。「本日、党の委託を受けて馬先生に以下のように通知します。1958年以前そして1959年末以降の2回にわたる先生への批判は誤っていました。実践が証明していますが、生育を抑制する、先生の新人口論は正確でした。先生に対して組織により犯された誤りを徹底して正し、名誉を回復します。馬先生がこれから元気かつ愉快に過ごされることを希望し、さらに健康と長寿をお祈りします。」寅初は答えて言っ

た。「とても嬉しい」「20年余り前、中国の人口は多いとはいえなかった。現在ではあまりに多すぎる。生産を迅速に発展させる必要がある！」この会見の様子は1979年7月25日に新華社が報道した。翌7月26日「人民日報」など多くの全国紙が新華社の報道を転載した。1979年9月11日、中共中央は、中共北京大学党委員会の1979年7月23日付け「馬寅初先生の平反に関する決定」に文書でつぎのように回答した、「中央は北京大学党委員会の馬寅初先生の平反に関する報告と決定に同意する」（鄧(2006)315；諸(2012)166-170）。

1979年9月14日馬寅初は北京大学名誉校長に任命された。1980年3月17日、自宅から北京医院に移った。1981年2月27日、中国人口学会が設立され、馬寅初は名誉会長に推挙された（若林(1989)39によれば初代会長には重慶時代からの友人である許滌新が就任した）。馬寅初は、1982年5月10日、病気のため北京医院で亡くなった。享年101歳（満99歳）であった（鄧(2006)340-341；諸(2012)170, 173, 179, 184）。

#### 参 考 文 献

##### 【中国語資料】

陳長蘅『中国人口論』商務印書館、1918年2月。

陳達『人口問題』商務印書館、1934年10月。

儲安平「向毛主席、周總理提些意見」（原載『人民日報』1957年6月2日）『教育文史哲個人學術交流網站』（<http://www.yxjedu.com>）

崔林 姚敏華「孫中山人口思想研究」『人口研究』1986年6期、35-40。

鄧加榮『馬寅初伝』上海文芸出版社、1986年3月。

鄧加榮『我国経済学泰斗馬寅初』中国金融出版社、2006年1月。

何家偉「南京国民政府個人所得税制度略論」『武漢大学学报』第61卷第1号、2008年1月、80-87。

何建章/朱宗炎/廖集仁「批判馬寅初反動的“新人口論”」『經濟研究』1960年第4期、1960年4月、55-68。

賀水金「抗日戦争与通貨膨脹」賀水金『1927-1952年 中国金融与財政問題研究』上海社会科学院出版社、2009年9月、189-228所収。

梁中堂「馬寅初事件始末」『中共山西省委党校報』第34卷第5期、2011年10月、48-77。

林毅夫 胡书东「中国経済学百年回顧」『經濟学季刊』第1卷第1期、2001年10月、3-18。

馬寅初「紐約市財政」（1914年博士論文の中国語訳 訳出は全集刊行にあたって試みられたもので本人のものではない、全集第1巻1-221（小稿の閲覧先に下線）。

———「在北京大学経済学会成立会上的演説詞」『北京大学日刊』1919年12月5日、全集第1巻301-302。

———「長期抵抗之准备」『時事月報』1932年第6期、1932年6月、全集第5巻425-427。

———「評財政部白銀政策」『綢繆月刊』第1巻第3期、1934年11月、全集第7巻258-267。



- 「非常時期之經濟問題」『銀行週報』第20卷第20期, 1936年6月6日, 1-5. 選集 126-133, 全集第9卷 226-236 (選集と全集で記事内容が若干違っている)
- 「法幣価値打破之危険」『貴陽中央日報』1938年12月18日, 全集第11卷 83-88。
- 「提議对發国難財者開辦臨時財產稅以充戰後之復興經費」『時事類編特別』第54期, 1940年7月10日, 選集 181-189, 全集第11卷 176-184。
- 「对發国難財者徵收臨時財產稅為我国財政与金融惟一的出路」『時事類編特別』第57期, 1940年10月20日, 選集 190-200, 全集第11卷 187-197 各所収。
- 「中国工業化与民主是不可分割的」1944年12月22日演讲文原載『民主与科学』1945年第1卷第1号, 『新華日報』1945年2月8日 2-3, 選集 201-213, 全集第12卷 255-275。
- 「在最高國務會議上的發言」1957年3月2日在最高國務會議第十一次擴大會議上的發言 全集第14卷 501-502。
- 「馬寅初談人口問題」『文匯報』1957年4月27日, 選集 575-579, 全集第14卷 575-579。
- 「馬寅初在北京大學談我国人口問題」『北京日報』1957年4月29日, 全集第14卷 580-581。
- 「我国人口問題与發展生產力的關係」『大公報』1957年5月9日, 選集 390-393, 全集第14卷 503-507。
- 「我国資本主義工業的社会主义改造」『北京大學學報』1957年第3期, 1957年6月, 5-37, 全集第15卷 29-81。
- 「新人口論」原載1957年7月5日『人民日報』, 『文獻』1979年第2期, 1979年12月, 34-59, 選集 394-418, 全集第15卷 1-25。
- 「談談我鍛鍊身体的体会」『新体系』1957年第8期, 1957年8月, 選集 419-421, 全集第15卷 26-28 (小稿では体会と表記)。
- 『我的經濟理論哲学思想和政治立場』財政出版社, 1958年2月。
- 「再談平衡論和团团轉」1958年7月24, 29, 30, 31日『光明日報』, 『北京大學學報』1959年第1期, 1959年3月, 69-88, 全集第15卷 208-236。
- 「我的哲学思想和經濟理論」『北京大學學報』1959年第5期, 1959年10月, 55-94, 全集第15卷 247-315 (小稿では理論と表記)。
- 「重申我的請求」『新建設』1960年第1期, 1960年1月, 選集 436-442, 全集第15卷 316 - 322 各所収 (小稿では重申と表記)。
- 『馬寅初選集』天津人民出版社 (全1卷), 1988年5月 (小稿では選集と表記 卷末に年譜 450-457 あり)。
- 『馬寅初全集』浙江人民出版社 (全15卷), 1999年9月 (小稿では全集と表記 第15卷卷末に年譜 378-401 あり)。
- 馬玉淳『馬寅初的故事』浙江古籍出版社, 2006年9月。
- 匿名「儲安平“党天下”驚嚇毛沢東數日失眠」傳奇人物網, 2014年10月23日 (<https://renwuwang.org/node3489>)
- 孫大權「“馬寅初面斥孔祥熙”辯折」『四川大學學報』2003年第5期, 141-144。
- 「中国經濟學社的興衰及其影響」『經濟學家』2006年4期, 13-20。
- 孫文『三民主義』(民智書局 1925年1月初版 台湾で出された1965年版と対照した)。
- 新華日報索引編輯組『新華日報索引』上海書店 (全9卷), 1963年7月。

徐湯莘/朱正直「馬寅初的經濟思想和政治立場」選集(1988) 1-16 (小稿では立場と表記)。  
諸天寅『陳雲與馬寅初』華文出版社, 2012年7月。

【日本語資料】

- 秋野義夫「馬寅初著『我的經濟理論哲學思想和政治立場』」『アジア研究』第7巻第3号, 1961年2月, 83-89。
- 井上昌三「反右派闘争続く 馬寅初追放も毛沢東勝利」『世界週報』1960年5月17日, 56-61。
- 王曙光『栄家の血脈』東洋経済, 2006年6月。
- 小竹文夫「中共における第一次五カ年計画批判—馬寅初氏の諸説を中心として—」『アジア研究』第5巻第3号, 1959年3月, 21-35。
- 鈴木岩行「馬寅初の重慶国民政府批判に関する試論」中国現代史研究会編『中国国民政府史の研究』汲古書院, 1986年12月, 447-465。
- 寺崎祐義「馬寅初の人口理論」『福岡大学経済学論叢』第7巻第1・2合併号, 1962年12月, 1-20。
- 福光寛「中国経済の過去と現在—市場化に向けた議論の生成と展開—」『立命館経済学』第64巻第5号, 2016年3月, 194-222。
- 方萬里「馬寅初博士の幽閉」『時局情報』第5巻第4号, 1941年4月, 180-183 (以下に同一文章あり。緒方昇『支那裸像』大同出版社, 1941年11月, 52-60)。
- 馬寅初「新人口論」毎日新聞人口問題調査会『資料64号 中共の人口問題』1957年10月, 1-14。
- 山内良一「マルサスの農工均衡発展論と現代中国における一つの投影—馬寅初の「团团転=総合的均衡」理論—」『熊本商大論集』第31巻第1・2号合併号, 1985年3月, 193-226。
- 若林敬子「現代中国の人口政策」同著『中国の人口問題』東京大学出版会, 1989年4月, 27-56。

付記 小稿は成城大学特別研究助成そして成城大学経済研究所第二プロジェクトの研究成果の一部である。小稿の執筆をまさに開始したときに、社会イノベーション研究会誌委員会(山田直巳委員長)から村本孜教授退任記念号への寄稿依頼があった。そこで小稿を、村本教授からの多年の学恩へのお返しとして同号に寄稿することにした。